

## 二. 二八事件以後の「沈黙」の意味 ——『国声報』『南光』副刊を中心に——

丸川 哲史

はじめに

- 第1節 「沈黙」の意味の広がり
  - 第2節 『国声報』『南光』副刊について
  - 第3節 「南光」副刊の持つ両義性
  - 第4節 抗戦文化と台湾
- まとめに代えて

(要約)

二.二八事件から国民党政権の台湾への全面撤退にかけての二年余りの時期について、既存の研究では、当時の台湾の文化空間においてほとんど自主的な文化活動が途絶えてしまったという見方が主流をなしていたように見受けられる。本稿は、陳儀に代わって台湾に赴任して来た魏道明(省政府主席)による施政以降、文学者楊逵の文芸活動への復帰に象徴されるように、また幾ばくか自主的な文化活動が活発化していたとの観点を取りながら、同年の五月から一九四七年末までの時期の台湾の文化状況についての考察を進めるものである。その時期は、大陸からの知識人が多く来台して来ており、その中でも国民党政権に対して批判的であった人物がまた散見される。本論文は、そういったいわゆる進歩派の知識人がどのような目論見を持って台湾に来ていたのか明らかにし、また同時に、当時の本省人側の知識人にとって、大陸から来た知識人はどのような存在として見えていたか、という問題について考察を加えるものである。

はじめに

一九八〇年代まで、戦後にかかわる台湾文学及び台湾史研究においては、二.二八事件以後全くの禁圧状態が言論空間を覆っており、それが五十年代の白色テロの時期にまで延長されているかの印象が強かった。しかし一九九〇年代後半から一転して、二.二八事件以後の言論空間を考察することが大きな課題となってきたようである。

この時期にかかわる大きな仕事としては、既に黄英哲が『二.二八学術研討論文集』(二.二八民間研究小組その他発行 1991)に収録された「許寿裳与台湾」<sup>1)</sup>において、進歩派の外省系知識人、許寿裳の魯迅紹介の事跡を紹介し、その台湾における役割の大きさを論じている。また黄の仕事は、その後に出された『台湾文化再構築 1945-1947 の光と影』(創土社 1999)において、国民党主流による「奴隸化」論——台湾人は日本植民地統治下において奴隸化されてしまったとする言説——が如何に本省系知識人に失望感を与えたかを論じており、「奴隸化」論が持つ重要性を強く喚起することになった。ただ黄の叙述は、台湾省編訳館(許寿裳が館長)が二.二八事件以後の五月に廃止されたことをもって、そういった進歩派の影響力が一挙に減退したとのイメージを作っている。だが同時期に出された陳映真・曾健民編による『一九四七—一九四九台湾文学問題論議集』(『人間』一九九九年秋号)は、そのような「奴隸化」論への乗り越えを意図した当時の楊逵の動きなどを紹介し、一九四七年以降にも進歩派の動きが存在していたことを指し示した。この『人間』の論集は、一九四七年の夏から一九四九年の春まで続いた『新生報』文芸欄、「橋」副刊に現れた台

湾における新文学論争を大きく取り上げたものである。ただし、この「橋」副刊の発掘それ自体は、林瑞明、彭瑞金などが雑誌『文学界』の一九八四年夏期号、一九八五年春季号によってその一部が紹介されたことが端緒となっている<sup>2</sup>。そして『人間』の論集は、具体的に前の『文学界』では紹介されなかった楊達の文章（「台湾文学」問答 第 131 期 1948/6/25）や大陸の論者の文章を大きく取り上げるなど、当時の台湾の言論空間における大陸からの影響関係、特に台湾で新文学運動を展開しようとした本省系知識人、外省系知識人の協力関係に関して広く議論されるための資料を提示することになったと言える<sup>3</sup>。

ただし、この『一九四七—一九四九台湾文学問題論議集』によって前景化された時期に関しても、果たして「橋」副刊誌上において新文学にかかわる論議が始まる一九四八年春以降が中心となっていた。つまり、それ以前の時期、二・二八事件からの戒厳令が解け、新聞・報道の活動が再び始まる一九四七年の後半の時期にかかわる言論空間、文化活動のあり様については、空白のイメージが残されていた。ところが近年、曾健民編による『新二・二八史像—最新出土事件小説・詩・報道・評論（光復五年史叢書一）』（台湾社会科学出版社 2003）によって、大陸における二・二八事件に対する進歩派知識人の反応が取り上げられ、続いて曾健民・藍博洲・横地剛編『文学二・二八（光復五年史叢書二）』（台湾社会科学出版社 2004）が出されることによって、当時来台していた外省系知識人なども含む進歩派の二・二八事件以後（一九四七年後半以降）に為された言論活動・創作活動に大きく光が当てられることになった。

筆者は、こういったごく最近の動向に触発されつつ、この二・二八事件直後の時期の言論空間に分け入り、そこに一体どのような文化状況があったのかを明らかにし、当時の台湾の言論空間のあり様が、大陸出身者との関係も含めてどのように構成されていたか検討してみたい。

では、筆者が取り上げる時期の政治状況について、一通り概観してみることにする。二・二八事件の混乱が一応の収束を見るのは、つまりこの時期の台湾における言論活動の再開の前提となるのは五月一日に陳儀に代わって魏道明が来台してからである。その日には行政長官公署の廃止が宣言され、翌日には新たに台湾省政府が成立し、その省政府首席となった魏道明によって、同時に戒厳令が解除され、新聞、図書、郵便にかかわる検査の解除が為される。このことが意味するのは、二・二八事件直後の恐怖の空間が、五月以降については一定程度、制度的には緩和されたということである。ただ現在までの二・二八事件やその直後にかかわる史的評価の側面で、一九九〇年代までの一般的な歴史叙述では、その二・二八事件以後、台湾の言論空間は完全に冷め切っていたという評価のされ方が主流であり、またこういった観察を延長させて、二・二八事件から一九四九年暮れの国民党政権の台湾への全面撤退までの時期を一面化し、この時期の文化状況について等閑視する傾向が多かったと言える。こういった叙述の傾向は、この時期の台湾の言論空間が全く閉じ込められていたとするような印象を与えるとともに、結果として、国民党主流とは別の考え方を持った大陸の進歩派の影響を低く見積もる傾向を助長していたように見える。ただもちろん、制度的な緩和は行われつつも、多くの台湾の知識人が精神的なトラウマから脱していなかったことは確かである。そのことを踏まえつつも、しかし現に史料が発見されている限りにおいて、その時期の文化状況を無視することはできなくなっているのである。

ここで一つだけ、前置きとして触れておきたいのは、大陸と台湾が政治政体として一体であった一九四〇年代後半の時期にかかわる研究が一九九〇年代から現在にいたるまで、台湾における最も大きな政治課題とされている「統独」問題に容易にリンクされてしまうことに関して、どのような構えを持つべきかという研究姿勢の問題である。一九八〇年代以降の台湾の本土化の流れの中で、もはや二二八事件はタブーではなくなったわけであるが、二二八事件も含めた一九四〇年代後半の台湾の文化状況にかかわる性格規定に関して、特に当時の大陸との関係をどう処理するかという点で、容易に「統独」問題に象徴される政治的布置に回収・還元されてしまう傾向が潜在すること——このことを如何に処理するかという課題である。それは現在においても、例えば二二八事件をどう叙述し、記念するかという議論に象徴的に現れているものである。一九九七年に举行された二二八事件五十周年の記念式典をメルクマールとして、台湾の主流の二二八事件評価は、外来政権に苦しめられた台湾人の悲劇という物語に沿って二二八事件の性格規定を加速させることになった。一方、そういった流れに対して、陳映真・曾健民等の『人間』グループのアプローチは、大まかにいうならば、二二八事件の性格について、当時の大陸も含めた民国体制に対する民主化の要求という構図を強調するものであり、その後の言論空間においても、民国体制内部からの国民党に対する批判者(進歩派)からの民主化の要求が持続的に為されていた、との見解を作ろうとするものであった。

台湾においてこの時期を扱うことは、不可避免的に叙述の枠組み自体が、現在の政治的な対立関係に跳ね返るところがあり、そういった緊張関係を強いられることになる。そういった状況の中で叙述の拠りどころとしたいのは、歴史家の E.H.カーが『歴史とは何か』で、「歴史とは歴史家と事実との間の相互作用の不断の過程であり、現在と過去との間の尽きることを知らぬ対話なのであります」<sup>4</sup>と述べた知見である。現在の政治的磁場の中で歴史叙述のディレクションのあり様そのものが決定されてしまうことは、ある意味では避けられない事態であると言える。だが、現在の主観の磁場からどのようにも歴史は論じえる、という別の意味でのニヒリズムにも陥ってはならないものとも思われる。要は、それをどのように自覚化するかにかかっているだろう。ただし台湾のこの時期については、さらに問題が複雑である。二二八事件の影響からする、この時期の最大の特徴とも言える「沈黙」という問題をも相手にしなければならないからである。つまり史料によっても測りきれないもの、顕在化し得ない「沈黙」の構造を相手にしなければならないことである。ただ少しだけ先んじて言えば、それはいわゆる本物の「沈黙」ではなかった。先述したように、二二八事件以後の言論空間は、一定程度緩んでおり、しかも「沈黙が支配している」ことへの警鐘が鳴らされていたのであるから。

## 第1節 「沈黙」の意味の広がり

二二八事件の直後の三月から四月にかけて、「清郷(農村討伐)」や戸口調査が実施され、実質的に重苦しい雰囲気台湾社会を覆っていたことは確かなことである。一つの山場となるのは、四月二十日に「二二八事件参与者自首期限規定」が公布されるに及び、呉新榮など一二名が自首す

るといふ出来事であった。しかしそれから一月も経たない五月一六日には戒厳令が解除されることで、一定の秩序の回復が宣言され、先述したように新聞・図書・郵便にかかわる検査が廃止されることとなった。

こういった言論政策にかかわる緩和の施策は、どのような要因によって為されたのか——当時の国民党政権が置かれた国際的なポジションが深くかかわっているように思われる。近年『戦後中国の憲政実施と言論の自由 1945-1949』を著した中村元哉は、その中で、カイロ会談前後からのアメリカ合衆国による中国大国化路線に引き入れられる形で、「一九四四年秋以降の国際報道自由運動や一九四五年春のサンフランシスコ会議を背景にして、抗戦末期以降の国民政府は、戦後五大国の一員として世界潮流に歩み寄ろうとしていた」と論じている<sup>5</sup>。中村は、戦後初期の国民政府が憲政の実施と言論政策の緩和を一貫して進めようとしてたことを論証しているわけだが、こういった傾向は、当然戦後の台湾にも引き継がれていたことであり、二・二八事件の発生以後についても、その路線に沿った弥縫策が講じられたと考えてよいだろう。陳儀に代わってアメリカ留学組の魏道明が省政府の主席として派遣されたことも、そのような合衆国を中心とした世界的な潮流に国民政府が歩み寄ろうとした経緯を補っているだろう。何よりも一九四七年とは、その初頭において形式的においても中華民国憲法が公布された年であったのだ。当時の国民政府は、戦後の西側諸国の民主・自由といった価値意識に配慮し、彼らの中国への認識を好転させなければならないと実感していたようである。もちろん細かく見ていけば、中村も同書で述べているように、大陸においては、一九四七年の春以降、言論統制が厳しくなっており、多くの知識人が香港や東南アジア(そして一部が台湾)へと移動した形跡もある一方で、むしろ台湾においては、二・二八事件における弾圧による社会の沈滞ムードが一般的になっていた経緯もあり、一九四七年春以降も言論の自由が一定程度緩和されようとしていたと観察されるのである。

こういった最中において、台湾における文化状況の緩和度を測る尺度として、社会批判を骨子とするリアリズムの文学、つまり新文学にかかわる議論が一つの基準となるものと思われる。二・二八事件から三ヶ月経った時点、王錦江(王詩琅)による「台湾新文学運動史料」が『新生報』「文藝」副刊(1947/7/2)に発表されることで、五・四運動に触発された戦前からの新文学運動の台湾における実在が改めて提示されることになった。この論文は、日本統治の遺毒が二・二八事件を引き起こしたとする、光復直後からの台湾人「奴隸化論」への反論として読めるものであるが、そのことは後に詳述する。

さて、さらに下って八月には、二・二八事件に連座して逮捕されていた楊達も釈放され、早くも同月には、中日文対照翻訳という画期的な試みとなる『中国文藝叢書』が出版されている(また同時期には、歌雷によって新生報「橋」副刊がはじまっている)。その意味でも、二・二八事件に参加していた楊達の釈放、及び彼の文化活動への復帰を基準とするならば、大陸における言論状況の悪化と対比して、台湾の一九四七年の夏において、二・二八事件以後の批判的知識人の言論空間への登場が容認されることになっていたし、一九四八～四九年をピークとする新文学にかかわる議論への萌芽が既に顕れていたことになる。

こういったことから、魏道明主席着任以後の時空において、政治権力の側としても陳儀が設

定した路線を再編しつつ、言論空間を一定程度緩める傾向にあったことが認められるわけである。しかしその上でも、やはり「沈黙」と形容されるような現象が実在したことも確かである。それは、当時の台湾の言論空間を規定するものとして、この時期に「沈黙」に類する文字が頻出することによって、ある意味では奇妙な形で表現されてしまっている。つまり「沈黙」の中身はいざ知らず、そういった「沈黙」という現象自体への違和感が表明されていたことは確かな事実なのである。

この時期の「沈黙」の意味を探る上で一つの指標となるものとして、当時の言論界において大きな役割を果たしていた台湾文化協進会の総合雑誌『台湾文化』の動向を取り上げたい。一ヶ月から二ヶ月の間隔で出されていた『台湾文化』の傾向を辿ると、やはりその主軸となっていた主編の蘇新が二・二八事件以後に大陸に逃れ、また許寿裳が一九四八年の二月に暗殺されることになるわけだが、そうであっても、『台湾文化』の元々の性格としてあった魯迅に代表されるような新文化運動的な色彩が一挙に後退したわけではない。決定的にその雑誌の性格が変わってしまい、純粋な民俗学の雑誌にリニューアルするのは、やはり一九四九年の四・六事件以後のことである。すなわち『台湾文化』は、創刊当時、游彌堅を理事長として多くの著名な本省系知識人を擁しており(また多くの半山も含まれ、また戦前において左派知識人と目される人物も含まれていた)、そのポジションとしては国民党主流とも一定協調関係にあるものの、その機能としては批判的な回路を保持していたメディアであったと言えるわけである。

その『台湾文化』の中で、五十年代の白色テロの到来を告げる弾圧事件、一九四九年の四・六事件の頃まで連載されていた楊雲萍による時事エッセイ「近事雑記」は、当時の台湾言論界の空気をビビッドに反映したものとして、一読に値する(ちなみに、第二巻第四期[1947/7/1]から、編集人には、二・二八事件以後、大陸に渡った蘇新に代わって楊雲萍本人が就任している)。周知のように楊雲萍は、東京への留学経験もあり、また戦前に帰台してからは『民俗台湾』の編集にもかかわっており、また戦後のステイタスとしても、台湾大学歴史系で教鞭を執るなど、台湾の言論界において既に大きな存在となっていた。その楊が二・二八事件以後の言論空間に対して、ある意味では有効な参照枠となるべきジャーナリスティックな発言を続けていたのである。

二・二八事件後の第二巻第四期(七月一日発行)に載せられた「近事雑記(五)」の中で、楊は、新たに赴任した魏道明の省政府設立大会における祝辞を引用しながら、『台湾文化』創刊の精神——五十一年もの間、日本統治にありながらも台湾人が抗日を志し続け、また決して民族精神を失わなかったという論旨——を再度確認する表明を行っていた。魏の参議会における祝辞は、台湾における抗日の伝統、民族精神の実在を称揚するものであるが、穿った見方をすれば、二・二八事件による台湾人の反感を緩和しようとするものであったと考えられる。つまり、楊が試みているのは、魏の発言に同調する戦略を取りながら、台湾の歴史的正当性を台湾人の側からも表明することであった。こういったポジション取りは、ある意味で『台湾文化』という雑誌に集まった本省系知識人(戦前には精神形成を遂げていた世代)の歴史的立場を象徴するものと言える。つまり、戦前の皇民化政策の只中で、楊雲萍などの本省系知識人が例えば池田敏雄など日本人の編集による『民俗台湾』に協力しながら、台湾の民族的自主性を保存しようとしていたことと見合

った戦略であったと見受けられるのである。そしてさらに、次号の「近事雑記(六)」(第二巻第五期 1947/8/1)では、もう一度参議会における魏道明の発言を支持する形で、二.二八事件以後の「沈黙」について注意を促している。楊は冒頭の部分で、このように述べている。

聞いたところによると、魏主席は省参議会で「人がものを言うのは問題ではない。人がものを言わなくなるこそ問題だ」と述べた。このお話はりっぱである。しかし問題は、「ものを言う」か「言わないか」というところにあるのではなく、「何を言うのか」また「何を言わないのか」ということだ。もしも「建設的」なもの言いでないなら、またおもねへつらうようなもの言いなら、何を言ったとしても、まさに問題になるのである。

現在本省のいわゆる言論機関の大部分の「性質」について、聡明なる魏主席は、きっとよくご存知のはずだ。私たちは何かを言わねばならない必要がないかのような。ただ「人がものを言わなくなるこそ問題だ」と言う魏主席は、時として一抹の寂しさを感じるであろう。

楊雲萍は、戒厳令が解除された後の言論状況について「聡明なる魏主席は、きっとよくご存知のはずだ」という言い方によって、「本省のいわゆる言論機関の大部分」のもの言いについて語っているわけであるが、つまりそれは政府の方針に追随するだけの他の官制メディアへの批判として受け取れるものである。この同じ文章の中で、楊はさらに、先述した王錦江(王詩琅)による「台湾新文学運動史料」(『新生報』「文藝」副刊第九期 1947/7/2)に言及しながら、台湾における新文学運動の伝統に注意を促すことによって、台湾文化が五.四運動以来の革新的で批判的な精神を喪失していないことを強調するわけである。つまりそれは、前号のエッセイを補うものとして、当時の台湾において、「建設的」なもの言いを為し得る資源を戦前からの台湾知識人の努力の一貫性の中に求めるスタンスであることが判明するわけである。

そしてさらに注意を引かれるのは、同じ文章の後半の部分で、陳儀の離台後の方針転換のため廃止されることになった台湾省編訳館の解体について語っている部分である。楊は、自分がそれにかかわっていたこともあり、率直にそれへの名残惜しさ、無念を吐露しつつ、そこで編纂されることが予定されていた史料のリストを付録として挙げてもいる。こういった楊の振る舞いから窺えるのは、二.二八事件以後の政治の再編製の契機の中で台湾省編訳館が廃止されることについて、婉曲に批判しているように読めることである。台湾省編訳館は、元々は陳儀が許寿裳を説得して作ろうとしたものであり、結局のところその廃止とは、台湾統治に携わる国民党内部の系統の変更によることが予想されるのである。

総じて、このように魏道明の言葉を流用しつつ、しかし新たに発足した台湾省政府の方針への婉曲な批判を展開している微妙な姿勢そのものが、当時の楊雲萍、あるいは『台湾文化』というメディアのポジションを象徴しているように思われる。後の一九四九年の四.六事件以後の、本格的な「沈黙」の時代の出現を知っている私たちからするならば、この二.二八事件直後の時期を生きていた知識人においては、国民党による文化統治の内部においてその派閥の力関係とも連動し

つつ、政府に意見を述べる自由がまだ確保されていたわけであり、その中で『台湾文化』というメディアが一定の役割を果たしていたことに間違いはないのである。

ただしここで、この時期の「沈黙」の意味について考えた場合、先の王錦江(王詩琅)の「台湾新文学運動史料」(1947/7/2)に見られるように(またそれを引用する楊雲萍の態度にも見られるように)、本省系知識人の側から日本統治における抵抗の歴史がなぜことさらに強調される必要があったのか、考えてみる必要がある。一つの典型的な例を挙げるなら、日本統治時代からの五四新文化運動に影響された新演劇運動(後には厚生演劇へと統合されていった)を先導していた、楊と同世代に属する王井泉によるエッセイが興味深い(「我的感想」『新生報』「橋」第二〇期 1947/9/19)。この「我的感想」も、王詩琅と同様にして、光復以後の台湾の文化復興を戦前からの台湾人の新文化運動の伝統の上に展望しようとするものであるが、その冒頭に記されていたのは、果たして当時の台湾の文化環境にかかわる違和感と批判であった。

多くの人が台湾に来て、台湾は文化のないところだとばかり言っている。このような話は、あるいは、精神生活の貧しさから来る寂寞感であり、あるいはまた、一種のうぬぼれからの傲慢さなのである。

私たちはそれについて特に話をするわけではないが、多くの友人同士、結局のところ文化、この二文字をどのように解釈すべきか、問い直している。しかしこの手の友人たちは、文字言語の転換から、彼らの認識や苦悩を伝えることができない。皆ただ沈黙するしかなく、そして誰かが勝手に台湾文化のために台湾文化の運動史を作ってしまうのを見ているしかない。

私たちはよく知っている——こういったことは日本の侵略がもたらした残酷さであり、またその結果として私たちが祖国の懐に還ったとしても、短期間で表現にかかわる技術が会得できなくなっているということなのだ。だが私たちは、自己の思想的立場、自己の闘争の経験についての理解を有しており、また好悪善悪の分別も、全ての現象も心にとどめており、さらに自分自身に対する批判さえも保有している。

…このような時、実験小劇場が立ち上がったのだ。彼らは、この実験小劇場が台湾で設立され、彼らの基礎が台湾民衆の中に打ち建てられようとしている、と主張している。…現在、この本省の演劇人が大半を占める実験小劇場では、さらに国内で有名な曹禺氏の傑作『原野』の公演を計画しており、彼らは練習に打ち込み、真剣な態度でこの度の新しい演出を実験しようとしている。

私たちは、ここに台湾文化の再生の叫びがあるものと見ている。…

前半における「台湾は文化のないところ」といった叙述においては、いわゆる二・二八事件の原因ともまた結果としても流布することになった、いわゆる台湾人「奴隸化」論が隠れたテーマとなっていることが窺える。「奴隸化」論の由来を遡るならば、『台湾接管計画綱要』(1945/3)に出てくる「廓清奴化思想」(奴隸化された思想を掃き清める)と言った発想に行き着くわけであるが、

戦後「台湾に文化がない」、あるいは「台湾人は日本によって奴隷化された」などの言説は、主に行政長官公署宣伝委員会サイドを出所として流布された言説であった<sup>6</sup>。しかしそのような「奴隷化」論とは、結局のところ台湾を統治した行政長官公署などの人間たちが、自分たちの統治の正統性を補強するイデオロギーであったわけである<sup>7</sup>。

さらにこのエッセイ「我的感想」の後半で語られているのは、大陸出身の陳大禹などの進歩的演劇人が來台しており、国語(標準中国語)と台湾語によって行われる先進的な演劇運動、「実験小劇場」が活動しており、そこに王井泉がかかわっていた事実である。このエッセイで取り上げられている「実験小劇場」は、抗戦期の大陸中国で始まった演劇集団である。その「実験小劇場」が光復後に台湾に持ち込まれ、そこで大陸の演劇人と台湾の演劇人がともに連携し合っていたのである。そして王井泉が「ここに台湾文化の再生の叫びがある」と「実験小劇場」への激励と期待を述べているように、明らかにこの「実験小劇場」は、光復後の「奴隷化」論を跳ね返すような文化の胎動を代表するものとして、台湾の文化人によっても位置づけられていたことが確認されるわけである。

同エッセイは結びにおいて、「台湾文化を祖国文化の懷の中で光り輝かせる」といった言葉もあるように、当時の中華民国体制の中に台湾が位置づけられており、さし当たって台湾が祖国に還ったこと自体へのネガティブな言葉はない。その意味で、この王井泉のエッセイも、今日の省籍矛盾のフレームワークに流し込むだけでは計り知れない文化状況が現出していた時期として、この二.二八事件以降の文化空間を考察する手がかりの一つとなっているように思われる。

## 第2節 『国声報』「南光」副刊について

ここ数年『一九四七—一九四九台湾文学問題論議集』(1999)を突破口として、二.二八事件以後の言論空間のあり様を叙述する仕事が積み重ねられつつあることは先に述べた。「はじめに」で言及できなかったところでは、藍博洲によるルポルタージュ『天未亮—追憶一九四九年四六事件(師院部分)—』(2000)、『麦浪歌謠隊—追憶一九四九年四六事件(台大部分)—』(2001)などが出版され、一九四七年～四九年の台湾における文化運動の实在が証明されて来ている。またこういった史料発掘(及びインタビューによる取材)の積み重ねの中で特に異彩を放つものとして、横地剛の『南天の虹』(藍天文芸出版 2001)がある。この『南天の虹』は、二.二八事件を木刻版画によって大陸や日本に伝えることになった木刻作家(評論家)、黄榮燦の台湾における活動を描いた仕事で、光復以後に台湾に来ていた大陸の進歩派知識人の活動のあり様について、包括的な観点を提出することになった。さらに先述したように、横地は、藍博洲、曾健民等とともに、二.二八事件直後の台湾の言論空間にける二.二八事件の影響を推し量る史料として、『文学二.二八』(台湾社会科学出版社 2003)をまとめ出版した。この仕事の最大のメリットは、以前の二.二八事件にかかわる文学方面の仕事に対して、特に一九七〇年代以降ではなく、できるかぎり一九五〇年以前に発表された言論活動・創作活動に基づきながら、二.二八事件直後の文化状況を再構成しようと試みていることである<sup>8</sup>。この『文学二.二八』は、二.二八事件の後で大陸に逃れた本省人作家の作品や当時台

湾に来ていた外省系知識人の経験に基づいた諸作品に光を当てており、この時期のいわゆる「沈黙」の意味を考察する上でもでも参考にするべき材料を提出している<sup>9</sup>。そこでは、基隆中学に来ていた外省人作家、欧坦生(丁樹南)の作品「沉醉」(『文芸春秋』第五卷第五期 1947/11/15)、及び「鶯仔」(『文芸春秋』第七卷第四期 1948/10/15)などが紹介され、また先述した雑誌『台湾文化』にも登場しながら、後にはほとんど足取りが掴められていなかった外省系作家、夢周による二・二八事件を主題とした作品「創傷」(『中華日報』「新文藝」副刊 第一九期 1947/4/20)も収められている。一方、本省人に限定した場合に、戦前活躍した作家でこの『文学二・二八』に登場した本省作家(知識人)としては、呂赫若、丘平田(蘇新)などが登場している。

しかし同時に想定できるのは、まだこの時期(二・二八事件直後の一九四七年の間)においては、新たに標準中国語を身につけた若い世代の文学者がまだまだ出て来ていなかったという事実である。まず当時の段階では、書面語の習得の側面でも、より外省系知識人による創作に多くの可能性があったということが容易に予測され得るわけである。戦後社会の文化環境においては、まず戦前において日本語作品として名を成した作家たちが言語的な理由から、また戦後に与えられた環境の不十分さからも、「沈黙」せざるを得なかったことが考えられる。またさらに、二・二八事件の影響として、何らかの意見を公的にすること自体への悲観的観測が特に本省系知識人の間に広がっていたことも想定される。こういった二・二八事件前後の沈滞した文化状況のあり様については、王白淵が『台湾年鑑』に執筆した三つに整理された問題点が象徴的である。つまり、①言語の転換による困難、②政府による言論統制の度合いが不明確であること、そして③物質的条件としての紙の不足である<sup>10</sup>。ただし楊逵などは先述したように、一九四七年の八月の釈放から、②の状況を跳ね返そうとするかのように既に活動を再開させていたわけである。しかし楊逵によって刺激された本省系の若い世代の知識人が『新生報』「橋」に投稿するなど、パブリックな側面で顕著な変化が見受けられるまでは、やはり一九四八年の春頃まで待たなければならなかったようである。

当時の大手新聞メディアにおける副刊の編集者にしても、例えば『新生報』の「文藝」副刊の何欣、「橋」副刊の歌雷など、やはり大陸出身者であり、本省人の目からするならば、編集方針にしてもそういった人脈の影響が色濃く反映していたという見方はおそらく成り立つものと思われる。ただしここで必要なことは、このそういった戦後の文化状況を観察する際に、それを性急に単純化された省籍の力関係へと一元化されるべきではなく、まずは外省系知識人にとっての二・二八事件以後の「沈黙」状況がどのように感得されていたかを探ってみることである。

そこで注目してみたいのは、高雄市(市長の裁量と権限)によって運営されていた『国声報』の役割である(実際の経営は、国民党特務機関の一つである「軍統〔軍事委員会調査統計局〕」に属する人物によって取り仕切られていた<sup>11</sup>)。この『国声報』は、一九四六年の六月一日に創刊されているが、その創刊に際しては、東京左連で活躍し、後には抗日戦争に従軍し、そして台湾にやって来ていた知日派の進歩派知識人、雷石楡も参加している。一九四六年夏の時期、雷は、当時経済的困窮が蔓延する台湾において問題化していた、「待応生」(ホステスなどの女性サービス労働者)への政府の一方的な取締りに反対するなど、批判的な言論活動を行っていた。また当時の雷

は、自分の詩集『八年詩集』を出版したり、また台湾女性の困難な境遇を扱った現代劇『断魂曲』を台南の『中華日報』「海風」副刊に載せるなど、実に旺盛な創作活動を行っていた。ただし後の回想録『春にもう一度 生活できることを』（潮流出版 1995）によれば、その後、『国声報』に関しては、市長の後退による経営陣の内紛を避け、一九四六年の十月には早くも退職し、台北へと出ている（台北へ出たばかりの時期には、黄榮燦宅で起居していたようである）。ただし実のところ、雷の『国声報』との関係は、途絶えたわけではなかった。二.二八事件以後の一九四七年四月一日より始まった「南光」副刊の主筆、呉忠翰と連絡を取りながら、幾度もその「南光」副刊に原稿を寄せることで、『国声報』に登場し続けることになる。その当の雷が「南光」副刊の場を借りて、二.二八事件以後の「沈黙」を語っているのである（「沈黙的発声」「南光」副刊第二二期 1947/4/22）<sup>12</sup>。そこには、二.二八事件に関連して自分の知り合いが行方不明になったこと、一斉戸口調査が完了すれば身分証が発行され移動が可能になるろうとしていること、さらに動乱自体は沈静化に向っているにもかかわらず、しかし神経質な空気が蔓延していることなどが書き記されている。ここでは、冒頭の部分だけを紹介しておく。

かくまでの沈黙は、窒息に至ってしまう。私は歌も歌えず、詩もかけない。私は毎日大学生たちとの「講書経(千篇一律の講義)」から帰って、この空虚な心を舐め、空虚な家で呆然としており、あるいは失踪し行方不明になった友人がどうなったか、またどんな影響を蒙っているか心配し、あるいは、残った米、炭、油、塩があとどれくらいもつのか計算している。なぜなら、すべての物価は、社会秩序の回復とは反比例しており、乗数倍に達する物価指数は、ますます神経を苛立たせているから。あるいはまた、戸口調査が完了し、身分証が発行され、移動が可能になることを待っている。時々悶々と鬱積して、長く仕舞ったままだった絵の具と筆を取り出し、脈絡無く静物を描きはじめるが、まさに心晴れやかならず、茫漠として、明暗や色彩にも鈍感になっている。たそがれの「宝島」!、今この美しい季節、しかし私は、その色彩と香りを感じ取れない。暴風雨の大動乱の後の今日、人々の心理は、まだ血生臭さに震えているのか。<sup>13</sup>

後の二.二八事件の原因やその実相を知っている現時点においては、ある意味、二.二八事件が持った意味の核心部分が論じられておらず、曖昧で内面的な世界に沈潜した叙述とも感得される。しかしもう一方で、『国声報』といった特務機関が管理するメディアにおいては、おそらく曖昧な言葉でしか表現し得なかったことも予想されよう。本人の後の回想録にもあるように、雷は個人的には当時の国民党体制について自覚的な批判者(進歩派)でありつつも、活用していたメディアそのものを統括した機関こそ、まさに批判されるべき対象(国民党の特務)そのものでもあったという複雑な事情が潜在する。しかしこの文章は、台湾全体が「沈黙」状態にあること、神経質な雰囲気蔓延していること、またそれに苛立ちを覚えている知識人がいることなどを現に表明している。つまり、先述した楊雲萍の文章について論じたように、「沈黙」が社会全体を覆っていることへの違和感の表明は為し得ていたのである。

ちなみに雷は、一九四九年春の四・六事件に連動する形で当局によって拘束されるまで、様々な形で台湾のメディアに露出し続けることになるが、特に『新生報』「橋」副刊において、彭明(彭明敏)との間で台湾社会の特殊性をめぐって論争するなど、活発な活動の軌跡を描くことになった。特に雷は、台湾に残る日本的要素についての評価についても、国民党主流とは別の議論も展開していた(「台湾新文学創作方法問題」「橋」副刊 第一二〇期 1948/5/31)<sup>14</sup>。彼の台湾観については、主観的思い込みも散見されるものの、東京留学の経験を有することからも、例えば台湾において日本文学が読まれることについて必ずしも反対していないなど、当時の国民党の台湾政策が総体として日本語禁止に向う中で、それに抗う提案をしていたことも特筆に値する。こういった部分は、過大評価し得ないものでもあろうが、例えば当時の大手のメディア『台湾文化』の論調においても日本語の廃止が規定の路線として推し進められていたことからするならば、日本語廃止に対する反応についても、単純に省籍の別に規定された構図には収まらないところがあったと言える。ちなみに国語推進委員会などの組織においても、『台湾文化』を主宰する台湾文化協進会の理事長、游瀾堅などがイニシアティブを発揮していたことが知られているわけである<sup>15</sup>。こういった辺りの当時の台湾の文化状況における複雑な配置というものについては、例えば呉濁流の『台湾連翹』でも、陳儀の統治から魏道明にバトンタッチされた時に多くの本省人が登用されることになったが、その多くが游瀾堅に代表される大陸帰りの「半山」であり、彼らが多くの台湾人の怨嗟的になっていたことなどが書き記されている<sup>16</sup>。やはり、当時の文化ヘゲモニーのあり様については、単純な省籍問題では解決し得ない複雑な事情があったと言うべきである。

話の筋を「南光」副刊に戻すと、いずれにせよ「南光」が背負った事情は、当時の台湾の言論界における複雑な事情の一端を説明しているように思われる。つまり、主宰機関そのものの性格とそこで活動する知識人の志向性のずれである。ただこのようなことは、ある意味では、大陸において日常茶飯事のことであったとも言い得る。しかしここでは、結論を急ぐ前に、「南光」副刊の始まりからその終焉までをひとまず概観せねばなるまい。

### 第3節 「南光」副刊の持つ両義性

『国声報』「南光」副刊は、一九四七年四月一日から始まり、同年九月一九日をもって停刊している。主筆は、呉忠翰という人物で、雷石楡以外には黄榮燦とも親交があり、また同時期に来台し一緒に行動していた友人、呉乃光が後に白色テロの被害者になるなどからも、基本的には国民党主流に対する批判者(進歩派)であったことは間違いない。ただ呉忠翰自身は、一九四八年の夏には台湾を離れているために、結果としては一九四九年春からの白色テロの嵐を逃れている<sup>17</sup>。

ところで呉忠翰に関わらず、この「南光」副刊に集まった外省系知識人を広く媒介するのは、中国東南部における抗日戦争の経験であったことが分かっている。大陸の研究者、王嘉良・葉志良によってまとめられた『戦時東南文芸史稿』(上海文芸出版社一九九四)によれば、雷石楡は、日中戦争の勃発によって日本から帰国し、抗戦に向けて発展していた中国詩歌会に属しながら抗戦に従軍しており、また編集長の呉忠翰にしても、抗戦の最中に成立した中国木刻研究会<sup>18</sup>に所

属し、主に東南部を中心に木刻流動展などを組織する活動が知られている(二人は、短い期間であるが、抗戦後には廈門の新聞『信報』の編集にも伴って携わっていた)。ちなみに二・二八事件の直前、行政長官公署宣伝局の招きで台湾に来ていた新中国劇社の欧陽予倩も、ここに多くの文章を寄せている<sup>19</sup>。こういった人間たちを媒介するものこそ、抗日戦争期における広範な文化工作活動の経験だったわけである。

さて呉忠翰は、抗戦期を通じて、抗戦と反飢餓を主題とし、また政府批判(国民党批判)をそこに含意させた木刻流動展を開催していたが、果たして「南光」副刊における呉の仕事の多くの部分は、この抗戦期の文化活動の紹介であった。先述した雷による「沈黙の発声」(第二二期 1947/4/22)が発表されるまでの時期に、呉は、矢継ぎ早に東南地区における抗戦文化活動を紹介している。大きな目玉として、抗戦期に亡くなった著名な木刻芸術家、羅清慎の木刻作品十四点を七回にわたって紹介し、また別枠の文芸欄、副刊「文芸週間」(第二期 1947/4/14)には、羅の遺作となったエッセイ「戦地速写」を掲載している。さらに加えて、同様に抗戦期の活動を論じた熊佛西の「論戯劇教育」(「南光」副刊 第九期 1947/4/9)や風炎「戦時東南文芸速写」(「南光」副刊 第一八、一九期 1947/4/18,19)など、東南地区における文学・芸術運動にかかわる紹介も精力的に為されている。こういった抗日戦争の中で興隆した大陸の文学・芸術活動の動態を台湾に紹介することは、やはり中国詩歌会や中国木刻研究会が、かつて国民党政権によって目の敵にされていた過去に鑑みるならば、やはり両義的なあり様を指し示しているように思われる。つまり、国民党主流も抗戦文化を主張する主体でありながら、それは専ら国民党統治の正統性を担保するために機能していたということ。単純化して言うならば、その内在的な志向性としては、二つの抗戦文化があったということになる。さらにこの後「南光」副刊は、ソ連から受けた影響が色濃く反映された文学論、演劇論、映画論などを紹介するとともに、プロレタリア小説の実作なども載せて行くことになるのである。

だが先述したように、『国声報』が当時、公的にはどのような機能を果たしていたかという側面からアプローチするならば、全く別の相貌が浮かび上がってくる。実際の経営主体が特務機関の「軍統」に属することからも、大陸から配給された映画フィルムや演劇が台湾に持ち込まれた場合に、この『国声報』『南光』副刊は、それを主体的に宣伝する媒体となっていた。例えば一九四七年七月に『八千里路雲和月』という高雄で上映された映画について、「南光」副刊では三回分にわたって誌面を提供している。この『八千里路雲和月』は、抗日戦争下における救国演劇隊を主題とした映画で、一九四七年に制作されたものであり、かつての抗日戦争下の国共合作期の息吹がそのまま反映された作品である。そしてさらに八月には、国防部新聞局によって組織された『新縣長』という演劇にかかわる特集が組まれている。その表題には、「国防部新聞局演劇三隊為擁護総動員戡乱救国公演『新縣長』専号」と記されている(第一〇三期 1947/8/1)。この『新縣長』は、抗日戦争期において日本側に協力する汚職官僚、買弁資本家を諷刺したものであり、『八千里路雲和月』と同様、抗日戦争下において発展した文化活動の一端をそこに垣間見ることが出来る作品である。その意味で、この二つの作品は、抗日戦争期における進歩的な内容を含んだ作品であることに間違いはないのである。しかし当時、こういった抗日戦争下において制作された文化産品が、どのよ

うに紹介されたかという文脈においては、やはり徐々に大陸における国共の対立に影響を受けることになる。『新縣長』専号』では、『新縣長』について解説した陳力群によるエッセイ「導演雜記」が載せられているのだが、そこでは露骨な「反共」的な文句さえ踊っている<sup>20</sup>。

私が再び「新縣長」を読んだ時、それは抗戦中の時代を扱った劇本だったが、勝利後の今日においてもやはり上演する価値があるものと感じた。我々が直面した敵、侵略者日本は既に崩壊したが、しかし目に見えない敵、共匪、奸商、汚職官僚が各地に潜んでおり、庶民の血を吸い、全ての社会的安定を破壊し、建国のエネルギーを吸い取っている。…<sup>21</sup>

『新縣長』が抗戦期に演じられていた頃の最大の敵は、日本帝国主義(とそれに与する者たち)であったはずだが、筆者、陳力群は、抗戦終了後、この『新縣長』における敵を「共匪」へと読み換えるという、対象(敵)の転換を示している。こういった記事からも推察されるのは、雷石楡やその後を引き継いだ呉忠翰などは、その政治的な立場として国民党の支配体制に対する批判者であったにもかかわらず、与えられた器自体は、このように既に反共政策を根本原理とする集団によって所有されていたということである。

このように編集者と経営母体とが呉越同舟のようにして居られることが如何に可能であったかと考えた場合に、総じて以下のように言えるのではないか。『国声報』の場合、あくまで国民党関連の直系であるということ、ある時期まではむしろ隠れ蓑としてその中で活動することが容易であったことが推定されるということ。これとは対照的に、大陸においては、一九四六年の暮れから事実上国共合作が破れており、また一九四七年の五月には、「維持社会秩序臨時辦法」によって多くの学生・知識人が弾圧され、また上海の民主派系の新聞『文匯報』、『聯合晩報』、『新民晩報』の三社が封鎖されるなどの事件がおきていた。それらのメディアは、つまり表向きの看板として、民主派であることが鮮明であったがために弾圧の対象になったと言えるだろう。

台湾において、二・二八事件以降、ある意味では全てに渡って党や政府が管理する(あるいはその管理が自明視されている)メディアだけになっていたと言える。その上で、大陸の抗日戦争のプロセスにおいて形成された抗戦文化が国民党の正統性の源泉として見込まれる限りにおいて、彼ら進歩派(国民党に対する批判勢力)は、むしろ管理されることなくフリーハンドで表現し得ていたということになる。そういったことは、例えば二・二八事件前後ではあるが、抗戦期からの延長で演劇活動を続けていた欧陽予倩が率いる新中国劇社が、当時の行政長官公署宣伝局によって招かれていた事実によっても補い得るものである。

欧陽予倩は、日本留学の経験も有する演劇人で、一九三七年には上海戲劇界救亡協會、文化界協會に参加し、桂林を中心に救国演劇活動を行っていた人物で、一九四五年には、中国民主同盟にも参加している。戦後の彼は、桂林から広東經由で上海に出て、一九四五年の十二月に、新中国劇社とともに台湾の地を踏んでいる。二・二八事件の発生によって途中からの公演がキャンセルになったとはいえ、欧陽予倩が率いた新中国劇社の来台期間(1946/12~1947/3)は、ある意味、台湾の知識人が大陸の文化に触れる場合のテストケースとなるものであった。

欧陽予倩が後に「南光」副刊に載せた公演当時の回想記(1947/5/1～5/5)は、上海の『文藝春秋』第五卷第一期(1947/7)に載せられたものである<sup>22</sup>。欧陽によれば、そこで演じられた「鄭成功」は、抗戦期に民族精神を鼓舞する目的で書かれた魏如晦の原著「海国英雄」を演劇に翻案したものである。この「鄭成功」は、周知のごとく台湾の事跡に取材したものであり、いわば欧陽予倩の中では、抗戦文化の伝達とともに、台湾の演劇人、民衆への連帯の意思を表明した演目の選択であったとも考えられる。周知のように「鄭成功」は、清朝に追われる身として台湾へとたどり着き、そしてオランダ軍を駆逐した功績によって知られているわけであり、原著の「海国英雄」は、抗戦期において民族精神を鼓舞する目的で書かれたことは二言を要さない。欧陽予倩もまた、「南光」に載せた記事の中で、「『鄭成功』が表現したのは、義侠だけではなく、また愚忠愚考式の『気骨』だけでもなく、不倒不屈の民族国家のための奮闘である」と述べている<sup>23</sup>。また別の演目「日出」についても、それは、日本に協力する買弁資本家とそれに連なるヤクザ勢力を諷刺するもので、抗日戦争下の出口の見えない民族の悲哀を台湾の観衆に知らせようとするものであった。

いずれにせよ、この時期の大陸から伝えられようとしていた文化活動の大きな資源は、抗戦期中に発展したものが大きかったということである。ただその抗日戦争の時期に育まれたものがどのように本省系知識人の中に伝えられようとしたのか、そこにどのような課題が孕まれていたのか、俄かには知りたいものとなっている。ただすぐにでも予想しえるのとして、言語の疎隔の問題があったらうし、また抗戦期に発展した文化スタイルというものがどのように感得されたか、という問題もあり得よう。ただそれにも増して、二・二八事件が目前に迫っていた時期の台湾社会のあり方、知識人たちの不満というものが勘案されなければならない。まずもって、新中国劇社を招聘したのは、行政長官公署の宣伝委員会であった。『台湾文化』(第二卷第一期 1947/1/1)の「本省文化消息」には、台湾省行政長官公署による招聘で来台していることが紹介されているだけでなく、台南、台中での公演の後、台湾省当局による国語推進運動を補助し、台湾人劇団員幹部を教育することなどが予定されている、との記述が散見される。

新中国劇社が台湾に降り立ったのは、一九四六年の十二月であり、その二ヶ月前に、日本語による新聞・雑誌等の日本語欄の廃止されていた時期だったという史実がある。日本語欄の廃止に関連して、それが明らかになった一九四六年の六月以降、地方の参議会などにおいては、廃止に反対する決議が次々と挙がっていた<sup>24</sup>。また裏を返せば、そのような地方の参議会レベルにおいて、行政長官公署の通達に反対する動きなどが、実際に生じているなど、意見の表明の自由が保障されていたということになる。いずれにせよ当時、日本語を主たるコミュニケーションの道具としていた本省系知識人にとって、新聞や雑誌から日本語欄が奪われることは大きな痛手となっていたのである。そしてその日本語の禁止など、本省系知識人にとって大きな打撃を与えていた機関として、宣伝委員会の存在があったことも思い起こす必要がある。

#### 第4節 抗戦文化と台湾

抗戦文化は、果たして台湾において、どの程度浸透することになったのか。特に、抗戦文化を伝える中で、国民党主流とは別の思考を持った人々の志向性の違いは、どの程度まで台湾の中で理解されたのであろうか。このことをはっきりと示し得るような十分な史料は少ないわけであるが、その少ない材料の中で、例えば先述した楊雲萍の「近事雑記」などは、大陸から来た新中国劇社について、必ずしも手放しの賛辞を送っていなかったことが示されている。それは、端的に当時來台していた新中国劇社の演劇に対する評価である。楊は、「近事雑記(三)」(第二巻第二期 1947/2/5)の中で、四つの出し物のうち「鄭成功」だけしか観ていないことを断りながらも、それに対して芳しくない評価を下している。

この度の新中国劇社の公演について、私は「鄭成功」しか観ていない。この「鄭成功」について言えば、私は失望した。

第一に脚本が良くない。これは「劇」ではなく、常識的な「史実」(?)の羅列にすぎない。作者は、鄭成功の生涯、性格に対して、新しい見方(New reading)をまったく持っていないのである。第二に演出がさほど上手ではない。率直に言って、私は欧陽予倩氏に演出家としての資質があるのかどうか疑っている。例えば終幕だが体裁をなしていない、単純に言って、卑しいレビュー<sup>25</sup>にも及ばない! 第三に、舞台装置がたいへん幼稚である。このような極端な「写実」(?)というものは、「電光(ライト)」を使用したり、「吐劍光(劍呑み)」を演じるのと同様に、浅はかで幼稚なものである。「舞台」は、「表現」(Present)が必要なものであり、「再現」(Represent)ではいけないのである。…<sup>26</sup>

こういった部分を引用したのは、取り立てて楊が実感した新中国劇社のレベルについて確認したいためではない。ちなみに、この次々号の「近事雑記(五)」(1947/7/1)において、楊は、別の作品「桃花扇」を見て、自分の欧陽予倩に対する評価が軽率であったことを率直に認めている。また総体的な欧陽予倩に対する評価としても、「わが国演劇史上におけるその貢献は、敬意を表すべきもの」とも語っている。ただ楊は、「鄭成功」について論じた自分の評価については間違っていないと述べている。

ここで必要なことは、欧陽予倩による「鄭成功」が結局のところ楊の眼鏡に合わなかった、その理由を吟味してみることであろう。楊の批評の仕方は、一見して舞台芸術としてのその未熟さに焦点が当てられているようである。ただ冒頭のところで述べていた「常識的な『史実』(?)の羅列」と言い切る部分には、「鄭成功」の物語が台湾を舞台にしたものであるところから来る、大陸の芸術家への期待値の大きさが影響していたように思われる。例えば、「近事雑記(一)」(『台湾文化』第一巻第三期 1947/12/1)において、ある通信社の記者が鄭成功がオランダを駆逐した事跡を紹介した記事について、その史実の誤りを指摘していたことなども、そういった期待の大きさとまたそれ故の失望を物語っているようである。楊の反応の核心には、やはり大陸の人間がどのよ

うに台湾を理解するのか、というテストの意味が込められていたようである。大陸の人間が演じる「鄭成功」に何か自分たちの解釈を越えた水準を期待しようとしていたが、それが果たされなかったということではないだろうか。

欧陽予倩は、自分が今進めようとしている台湾公演について、ほぼリアルタイムに近い形で新聞に自分の経験を語っている。例えば、『大明報』(1946/12/15)の取材に答える形で、抗日戦争期の脚本の執筆において、常に検閲の危機があり、何度も削られ、書き直しを命じられた経験を語り、また「中国は大戦を通じ、内戦がまさに目前に迫っている今日、どうして一つの傑出した反戦演劇が生まれないのか」と語るなど、凡そ内戦の危機に触発された物言いを行っていた<sup>27</sup>。また別の媒体では、台湾における「鄭成功」の演出に触れて、原著(「海国英雄」)は抗日戦争下の上海において作られたものであり、台湾で作られたものでなかったことがその出来映えの不十分さに繋がっていたとの認識を示す発言もある<sup>28</sup>。こういった経緯からも、欧陽予倩等の新中国劇社の演劇そのものが、多分に抗戦期に大陸で発展したスタイルを踏襲しており、必ずしも芸術的に念入りに練り上げられたものではなかったことが、楊雲萍からの批判を受けた一つの理由として挙げられるかもしれない。しかし、新中国劇社が台湾の知識人との間で必ずしもうまくコミュニケーションが取れなかった理由は、実はそれだけではなかった。

横地剛は『南天の虹』の中で、この新中国劇社の公演の様子について、裏舞台で手伝っていた黄榮燦の行動から類推し叙述している。当初新中国劇社の公演は、言葉の疎隔の面からも特に本省人の観衆には不評であったものの、黄榮燦の手配によって急遽印刷物が作られ、言語の疎隔が埋められようとした事実を書き留めている<sup>29</sup>。また横地は同書の中で、行政長官公署宣伝委員会によって招かれた新中国劇社の公演が「国語普及」の掛け声とともに紹介されていたことが、本省系知識人側にかかなりの誤解を与えていたとも論じている。当時の本省人知識人においては、既に宣伝委員会経由の文化は嫌悪されるものとなっていたのである。またこれと関連するように、『台湾文化』(第二期第二巻 1947/2/2)の「本省文化消息(一)」にも、この「鄭成功」について、「各新聞とも、その「成功」を賛美していたが、一部本省戯劇専門家はそうではなかった」と記されていた<sup>30</sup>。

このように欧陽予倩の率いる新中国劇社の劇の受容のされ方そのものが、当時の台湾における大陸文化の受容の問題点を指し示しているように思われる。しかしそれは、繰り返しになるが、大陸経由の文化流入を一枚岩として見る見取り図だけでは解けない、国民党主流の文化政策をめぐる複雑な政治状況の中で生じていたものなのである。

話の筋を楊雲萍の新中国劇社による「鄭成功」への評価に戻すと、問題はやはり、大陸中国と台湾との間における一九四五年以前の戦争と近代化の経験の差異が、どのように埋め合わされ、整理されようとしたのか、という問題に尽きるのではないだろうか。近藤正己が『総力戦と台湾』(刀水書房 1996)の中で明らかにしたように、台湾の知識人の中でも、多くの人間が大陸に渡って抗戦に参加し、また多くの人間が「半山」となって戦後の台湾で活躍していたことが知られている。さらに呉濁流の『アジアの孤児』でも描かれていたように、戦前戦中の台湾人は、結果として大陸の中国人から嫌われる存在になっていた。大陸に行った多くの台湾人は、日本側の軍属や

通訳、ジャーナリストという形で、むしろ中国と敵対する方向で動員されており、また一九三七年以降のいわゆる皇民化の時期においては、台湾にいた知識人も日本側に立った文学・芸術活動に動員されていたわけである(先述した王井泉などをその典型として)。その意味で、光復後の台湾の知識人にとって、大陸において抗日戦争とともに発展した文学・芸術運動が孕み持つ課題を如何に吸収するかということは、台湾の祖国化のプログラムにおいても、複雑な歴史的背景を孕んでいたものだったのである。

特に台湾側から言えば、歴史的前提として世代的なもの、あるいは日本統治時代からの社会的ポジションによる日本統治への態度の濃淡というものがある。例えば楊逵、王詩浪、楊雲萍、王井泉などは、『民報』など中国語の新聞が普及していた世代にもあたり、日本統治に対しても多分に面従腹背していた側面が多かった。これらの人々の中で、楊逵以外は、白話文による表現も可能であり、戦後直ぐに表現活動に復帰していたと言える。しかし、新聞における漢文欄が廃止された一九三七年以降に最も活躍した若い世代の日本語作家たちなどは、まずその存在が戦後の「奴隷化」論の第一のターゲットになっており、また歴史的資源の限界から中国語による表現への切り替えが困難であった。それらの人々にとって、言語の切り替えの問題は国民党の文化政策への反発に繋がり、言語の切り替えの手前で、表現活動への見切りとして「沈黙」に繋がったという側面があるだろう。そして一九四九年の国民政府の台湾への撤退、そして内戦体制によって正当化された独裁政治が、その後の文化構造を根本的に決定してしまったのである。ではそういった状況がなければ、あるいは抗戦期を通じて大陸において発展した文学・芸術の史脈は、楊逵が願ったような文化交流という形で進み得たかもしれないし、逆に日本統治下にあった台湾固有の歴史的条件を大陸側が理解するプロセスも進行し得ただろうとも予想される。しかし繰り返しになるが、現実として、冷戦(内戦)の政治はそれを許さなかったのである。

筆者が試みたかったのは、あり得たかもしれない別の歴史を予想することではなく、当時の「沈黙」の根にある、当時の水準においては中々気づかれなかった構造を明らかにすることであった。繰り返しになるが、大前提として、二二八事件における凄惨な虐殺と粛清が進行したことによって、重苦しい雰囲気台湾社会を覆っていたことは確かなことである。そういった文化環境において、ある意味では大陸の抗戦文化が怒涛のように台湾に入って来る中で、それらの文化の担い手の中から、当時の国民党の支配体制に対して批判的な立場に立つエイジェントを探し当てることは、さほど簡単なことではなかったようである。しかし、先述した王井泉の「我的感想」に代表的なように、ある手ごたえを持って、大陸の演劇人との連携を進めていた知識人もいたことは、強調しておかねばならないだろう。台湾側の知識人のある部分では、既に「奴隷化」論を宣伝する部分と、そうでない大陸知識人を弁別することができていたのである。

ただそうであるにしても、大陸から来ていた多くの知識人の政治的傾向について、その全てを詳らかにすることは不可能であり、そこには様々な差異を含んだベクトルとニュアンスが潜在していたことが想定されるわけである。一つの例として来台した後、様々なメディアに登場していた若き作家、夢周によるエッセイ「台湾に文化はあるのか？」(『台湾日報』「台風」副刊 1947/2/12)が、奇しくも『台湾文化』の楊雲萍の「近事雑記(四)」の同ページのコラム「五分五分」(ペンネ

ーム:差不多)で取り上げられている事態に注目してみたい。この「台風」副刊は、省党部書記長によって編集されたものであり、当時の省党部と『台湾文化』(文化協進会)との間の微妙な関係というものも影響しているようである。そこで取り上げられていた夢周の「台湾に文化はあるのか?」は、台湾の文化組織が高級官僚に付き従う形で運営されている事態への批判であった。

文化組織は、風雅を装った大官僚の指導によって成り立っている。ある時には会議、また映画上映、そして雑誌の発行、さらに踊りに興じたり・・・実際の成果がどこにあるのか、誰もわからない。もし台湾に文化があるというなら、そういったものが文化なのか? また台湾に文人がいるというなら、そういった人々が台湾の文人なのか?<sup>31</sup>

このような夢周の批判は、『台湾文化』に対する批判として受け止められ、「五分五分」の筆者、差不多は、それに対して次のように対応している。

思うに、台湾の文化組織(機関)は、その主たるものとして四つある。公署の「宣伝委員会」が一つ目。省党部の「文化運動委員会」が二つ目。林紫貴氏の「台湾文芸社」が三つ目。半官半民の「台湾文化協進会」が四つ目。一つ目は兄、二つ目は姉、三つ目が妹。四つ目をなんと呼ぶべきか分からない、おそらくは「乾児(義理の父子の誓いをした者)」であろうか!

夢周氏の言うところの「風雅を装った大官僚の指導によって成り立っている」文化組織とは、おそらく四つ目の「乾児」を指しているのだろう。なぜならその組織の幹部の一部は、教育処長、市長、図書館長、博物館長、公署の参議なのだから。

しかし夢周氏の言うところの「ある時には会議、また映画上映、そして雑誌の発行、さらに踊りに興じたり・・・」は、「乾児」だけではなく、兄、姉、妹たちもいっしょのことなのではないか。

台湾に一つの諺がある。「五分五分」というもの、つまり「誰が誰に対しても笑ってはならない」、「差不多(どっちもどっち)」という意味である。

「台湾に文化はあるのか?」という問いは、まず台湾の文化人一般に対するというよりも、台湾の文化状況が既に官僚化しているという認識があり、それへの批判であった。その意味で、この例などから分かることとして、当時の台湾の文化状況にかかわる問いのあり方というものが、単に大陸と台湾との間の文化の優位性という水準だけに止まらない配置において為されていたと言う事実である。この例はおそらく、各文化組織間のライバル関係を背景にして発せられていたことと考えられる。まず文面には、当時の主たる文化組織として、宣伝委員会、省党部、台湾文芸社、台湾文化協進会が挙げられている。そこで筆者、差不多によれば、夢周が書いている『台湾日報』(省党部)自体が大手のメディアなのであり、差不多は、結局お互い様として夢周の批判を受け流すという構図になろう。ただ現実にこの時『台湾文化』と『台湾日報』とが、どちらが官僚文化に墮していたかと問うことは、さほど意味のあることではないだろう。結果論として、大

陸に脱出した夢周が、国民党主流に対して自覚的批判的な知識人であったことは、後から知られる情報ということになる。

現段階において、こういった複雑な組織関係を細かく整理し尽くすことは不可能であろう。だが確かなことは、ここにあるようなメディア同士のつばぜり合いが、国民党指導下の各文化機関における複雑な対立関係を通じて表現されていたという事実である<sup>32</sup>。

さらに大陸出身の進歩派の他の例としては、やはり「南光」副刊で活躍していた雷石楡、吳忠翰、吳乃光(林基)、それから黄榮燦の友人、汪刃鋒(刃鋒)などが目立っていた。例えば、吳乃光(林基)は、「国語」の浸透の困難さというものに直面しながら、台湾における新文学運動の低調さを嘆いていた。ただしそこでも、吳の主張からは、言語の問題以外の台湾の現状にかかわる苦悶の原因として、「客観的な現実原因が存在する」といった曖昧な表現によるものであるが、新文学運動を抑圧する勢力への批判が感得されるのである<sup>33</sup> (後に吳乃光は、白色テロの被害者となる)。さらに汪刃鋒は、同様に「南光」誌上において、かつての大陸において抗戦を背景とした芸術運動に違反する「悪魔」<sup>34</sup>が存在していたなど、今日的な見方からするならば、明らかに国民党政権への批判が仄めかされていた<sup>35</sup>。こういった数々の論調からも、国民党の管轄下にあったメディアにおいて、その組織的背景は必ずしも詳らかではないが、明らかに当時の体制に対して批判的な進歩派が多く来台していたし、婉曲な表現ながらそれへの不満や批判が為されていたことが散見されるわけである。また当然のこと、彼らの台湾観も当然一様ではなかっただろう。ただ明らかなのは、いわゆる進歩派と呼ばれる者たちの共通の意識として、横地剛が主張するように、彼らは己の権力基盤を維持するためのロジックとして使われていた「奴隸化」論には組していなかったということである。

## まとめに代えて

このように、当時の文脈に即してみれば、単純に現在における省籍矛盾を当てはめただけでは解けないような様々な問題の潜在が確認できるわけである。最低限確認し得ることは、大陸において抗戦とともに形成された国民党主流への批判勢力が、台湾において一定の発言の場を持っており、またその中で国民党の文化政策への批判を仄めかしていたということである。

問題を整理すると、こうなるのではないか。一九四七年の二二八事件に至る文化的コンテクストの中には、明からに長官公署の宣伝委員会などによる「奴隸化」論があり、それが原因とも結果ともなって、台湾社会の中で特に本省系知識人を「沈黙」、及びルサンチマンの方に追いやっていったということがあった。ここにおいては、権力による弾圧への恐怖に加え、公的言語の転換による日本語世代への打撃があったと言える。こういった文化の空白において、白話文によって表現可能だった本省系知識人と大陸出身の進歩派知識人は、国民党によって押さえられていた文化組織やメディアの内部において、婉曲な形でありながら、共に国民党の文化政策を批判しようとしていたわけである。

「はじめに」で述べたように、総じてそういった文化空間が成立していた要件として、やはり

当時の国際環境としてアメリカ合衆国主導の戦後秩序の成立に向けて、国民党政権は、一定の言論統制の緩和が必要視されていたことが指摘できるであろう。しかし当時の切迫した状況の中で、大陸の抗戦文化の成果をもたらそうとした外省系の知識人と本省系知識人との間では、一定程度は共闘のチャンネルを持ちかけていたものの、欧陽予倩の新中国劇社の例に見られるように、様々なすれ違いもあった。そのすれ違いの主たる要因として、第一に大陸の文化人総体が、「奴隸化」論を主導した勢力と混同されてしまいかねない政治状況があったと考えられるが、もう一つには、大陸の抗戦文化がどのように台湾において浸透して行くかという際に、そこに歴史的背景の違いを超えていくための十分な猶予が与えられていなかったということがあったと考えられる。

根本的に抗戦文化の導入は、多くの人間が日本側に立たされていた台湾人にとって微妙な問題を孕んでいたことが予想されるとともに、国民党統治にかかわる正統性の担保としても表向きには「抗戦」が利用されていたことが大きかった<sup>36</sup>。そういった背景において、当時の台湾人知識人にとって、抗戦を担った勢力の中の陣営の違いを確認することは、ある自覚した部分においては可能であったようであるが、また多くの部分については二・二八事件を契機として、筆を折っている。この時期、張文環、龍瑛宗など多くの日本語教育世代の本省系知識人が筆を折っているが、公的言語の転換と言論弾圧への恐怖に加えて、大陸からもたらされた文化総体への関心の消失があったのではないかと考えられる。

ただしこの間も、例外と言えるかもしれないが、楊逵による大陸文化の紹介は続いていし、演劇活動を担う部分においては、大陸の知識人と本省系知識人が合作する機運が潜在していたということである。そしてそこに、『国声報』「南光」副刊や『新生報』「橋」副刊の登場が重なって来るわけである。「南光」の場合は高雄が中心であったが、特に「橋」の場合には、『新生報』それ自体が宣伝委員会に属するメディアであったという意味からも、当時の言論空間の緩みあり、白色テロを経た後の感覚からは奇妙に見えるほど自由であったという言い方も出来る。「橋」の創刊が、「二・二八事件参与者自首期限」である一九四七年七月三十日の翌日であることは、ある意味では出来すぎているとも言えるが、やはり事態はそのように動いていたわけである。ただし繰り返しになるが、結果として省籍を越えた文化活動の機運が目に見えるような顕在化したものになるまで、やはり一九四八年の春を待たなければならなかったようである。大手メディア『新生報』「橋」副刊において、楊逵を媒介とした若手本省人知識人の登場が一つの指標となるだろう。そういった若い世代の成長が、一九四七年以後の「沈黙」を打ち破りつつあったことは、先述した藍博洲の仕事（『天未亮—追憶一九四九年四・六事件（師院部分）—』、『麦浪歌詠隊—追憶一九四九年四・六事件（台大部分）—』）などにおいて、証明されている。かつて新中国劇社によって演じられた「日出」は、一九四九年の一月、台北師範学院の台語戲劇社の学生たちによって「天未亮」という題名で台湾語劇に改変されて上演されることになったのであり、また同年二月には、台湾大学を中心とした外省・本省の学生が混ざった麦浪歌詠隊が台湾各地に大陸の民衆歌を紹介することになるのである。

ただいずれにせよ、二・二八事件から一九四九年の四・六事件までの時期を、台湾現代史のトータルな像の中でどのように位置づけるかということは、さらに今後の課題として残るであろう。

そこを単なる例外として見るのか、あるいは冷戦期に封じ込められた歴史として再評価するのか、冒頭で、E.H.カーを引用したように、この部分にかかわる評価の動向も、おそらく現在の台湾の社会動向と無縁ではないものと思われる。

## 注

- 1 黄英哲「許寿裳与台湾」、『二・二八學術研討會論文集(1991)』二・二八民間研究小組、台美文化交流基金会、現代學術研究基金会 1991 115-139 頁。
- 2 さらに彭瑞金は「橋」始末記を『台湾史資料研究』(1997 第九号 34-47 頁)に執筆することになったが、その「橋」にかかわる性格規定は、主編の歌雷の努力を一定評価しつつも、その活動は台湾への無理解を前提としており失敗であった、という評価に落とすものであった。
- 3 「一九四七—一九四九台湾文学問題論議集」によって、特に一九四八年春以後、本省、外省を問わず、多くの新文学運動にかかわる議論が出てくることが示された。特に興味深いのは、楊達の「如何建設台湾新文学」について、大陸の論者、范泉などの論者による台湾新文学への評価が引用されていることから、台湾・大陸を繋ぐ新文学にかかわる議論のインターテクスチュアリティを明確にしたことである。
- 4 E.H.カー『歴史とは何か』岩波新書 1962 40 頁。
- 5 中村元哉『戦後中国の憲政実施と言論の自由』東京大学出版局 2004 54-55 頁。
- 6 「社論 肅清思想毒素」『新生報』(1945/12/17)などが、いわゆる奴隸化論の典型であるが、こういったものは、新聞以外では、陳儀による参議会での発言においてもなされていたようである(「台湾省三議會開幕詞——1946/5/1」台湾省行政長官公署宣伝委員会編『陳長官治台言論集 第一輯』1946)。
- 7 横地剛『南天の虹』藍天文芸出版社 2000 144-152 頁参照。
- 8 この『文学二・二八』以前では、林双不の編著による『二・二八台湾小説選』(自立報系出版 1989)、及び許俊雅の編著による『無言的春天——二・二八小説選』(玉山社 2003)があるが、いずれも一九七〇年代以降の時空において書かれた作品が、半分以上を占めるものとなっている。両書とも、十本の小説作品中、光復期が三つ、七十年代以降の創作が七つとなっている。
- 9 『文学二・二八』の中で、特に注目される新しい史料としては、当時台湾に来ていた若き文学者、夢周(楊夢周)によって、二・二八事件をそのものを扱った小説「創傷」が『中華日報』「新文藝」副刊(第一九期 1947/4/20)に載せられていることである。
- 10 二・二八事件以前に大部分が執筆され、二・二八事件以後の六月に出版された『台湾年鑑』(台湾新生報社刊の「文化」の章を執筆したのは、王白淵である。王によれば、光復以後の文学の不振には、多く三つあることが述べられている。一つは、公用語(書面語)の転換であり、特に戦前から日本語を使っていた本省人作家の「沈黙」の一端がここに表現されていると言えよう。二つ目は、日本統治時代から引き続く、「表現の自由」に対する懐疑である。おそらく、二・二八事件以前の執筆によることから、ここでは、「表現の自由」の限界が確認されない困難を指し示すに留められている。そして第三に挙げられたのが、紙の不足による出版業全体の不振、ということになっている。(『台湾年鑑五(復刻版)』海峡出版社 1403-1404 頁参照。)
- 11 こういった裏事情については、雷石楡の回想録『もう一度 春に生活できることを』(潮流出版一九九五) 97-99 頁を参照。
- 12 雷石楡「沈黙的発声」、『新生報』「南光」副刊 第二二期 1947/4/22  
ちなみにこの文章は、横地剛・曾健民・藍博洲編『文学二・二八』(台湾社会科学出版社 2004)にも収められている。351-356 頁
- 13 前掲書『文学二・二八』 351 頁
- 14 「台湾新文学創作方法問題」「橋」副刊 第一二〇期 1948/5/31  
雷は、このエッセイの中で、台湾における新文学運動の方向性について、以下の九つの提言をしている。  
(一)日本のファシズム統制を手段とした有毒の思想を消去するためにも、日本の資本主義がもたらした有益な面——学性、技術的組織力、事物に対する広範な知識、世界文学の遺産が移植された効果を

受け入れ、消化する。

- (二)中国の文学遺産を受け入れ、摂取する。特に五四以来の新文学の成果(台湾知識界においては、魯迅は既に知られた作家になっているが、日本語の翻訳による理解は、やはり原文による体得には及ばない)。この方面ではすでに、疎隔していた祖国との接触の機会があり、文字使用と創作の助けとなっている。
- (三)人物、性格、習慣を適切に表現するために、会話部分において地方語を用いてもよい。国内の作品のもそういったものが多くある。例えば、魯迅において南方の訛り、北方の声調が使われ、張天翼においては多くの上海が使われ、老舎においては最も北京語方言が多く、艾蕪においても多くの西南地方の方言が使われ、歐陽山においても広東語が混ぜられている。いまだ普遍化されていない地方語であるが、注釈をつけ、当地人でない者も分かるようにするのがよい。台湾語の語彙もおそらく、十全には使えないだろうが、音を模倣すればよい。
- (四)自分が最もよく知っている、理解している生活を書くこと。古い倫理意識、腐敗した習慣、有害な思想を具体的に暴露したり、悲劇の方法で風刺すること。また、プラスの側面の発展についても、必ず感情や思想、あるいは行為イメージの典型的な過程を通じて把握し、表現すること、ただし神秘的なもの、通俗的なものには流されないこと。
- (五)本省の過去の作家の作品を検討すること(阿瑞氏が「過去の台湾は文学の砂漠であったとも言える」と述べたのは、言い過ぎであると思わざるを得ない)。中国語で書いたもの、日本語で書いたもの、また光復以後に書かれたものについても、必ず検討と批判を加える。
- (六)台湾の民間文学、歌謡や伝説などを研究する。(多くの人が指摘する「呉鳳」の物語については、現在においては必要なものではないと思われる。)
- (七)高地民族以外の各民族の原始的な芸術についても、力を入れて研究すべきである。
- (八)可能な限り、幾つかの外国文学を学ぶこと(日本語も勿論保持すべきである)。それらへの接触の作用を通じて、直接的に世界性を認識する。また翻訳を通じたものであっても、私たちの文学発展の助けとなる。
- (九) (中国の文字では適当なものが見つからない場合)ある種の意義、思想を表示する日本の既成の語彙で、中国文学において既に摂取されている良いものについては、その使用を続ける。例えば、「帰納法」「演繹法」「立場」「目的」「組合」「転換」「過程」「転向」「労働者」などである。しかし、ある日本語と中国語は相反する意味をもってしまうし、また適用できないものもあり、十分に弁別しなければならない。例えば、「勉強」「案内」「厄介」「有難」「粹」「大丈夫」「腰掛」「気嫌」など、数え切れないほどある。だから、まず中国語の習得が必要なものであって、生半可に流用するのはどうしようもない。
- 15 ちなみに『台湾文化』の組織的バックボーンである台湾文化協進会の理事長、游彌堅(台北市長)は国語推進委員会の委員も兼任していた。この委員の中には李万居などもおり、総じて戦後台湾において高次のポジションにいた半山は、積極的に国語を推進する側に立っていたと言える。
- 16 吳濁流『台湾連翹』台湾文庫 1987 225-226 頁参照。
- 17 吳忠翰の足跡は、横地剛の『南天の虹』に詳しい。広東省豊順県出身、本名は吳宗漢。一九四二年から廈門大学法学院で学ぶ。中学時代から抗戦漫画木刻宣伝隊を組織し、作品を発表していた。一九四三年五月には、中国木刻研究会の承認のもと、福建分会廈門大学支会を発足させ、さらに同年夏からは、多くの版画家とともに「中外木刻流動展」を開催した。
- 18 中国木刻研究会(略称「木研会」)は、一九四一年一月、重慶の中ソ文化協会ビルにおいて成立した。王琦、丁正献、劉鉄華、邵恒秋、羅清楨などが重慶総会常務理事として推挙された。
- 19 欧陽予倩「我在台湾導演的三個戲(一)~(五)」(『国声報』「南光」副刊)  
(一)第三一期 1947/5/1、(二)第三二期 1947/5/2、(三)第三三期 1947/5/3  
(四)第三四期 1947/5/4、(五)第三五期 1947/5/5
- ここで欧陽予倩は、台湾で公演した「鄭成功」、「桃花扇」、「日出」について紹介しつつ、それらの劇が、台湾にとっては日本を追い出す比喩として機能していたこと。あるいは中国社会(台湾社会)内部における投機分子に対する批判であったことなどを記している。
- また、欧陽予倩は、「農村戲劇教育的商討」(『国声報』「南光」副刊 第八七期 1947/7/6)の中で、抗戦期において、農村における教育活動の必要性が認識され、知識人の活躍する場が増していたことなどの回想を記している。

- 20 この『新縣長』の原作は、宋之によって書かれたもので、抗戦期の地方都市を舞台とした創作劇。劇中の大筋は、悪辣な儲け方をする地方劣紳と清廉潔白な官吏が対決するという筋書きである。
- 21 陳力群「導演雜記」、『国声報』「南光」副刊 第一〇三期 1947/8/1
- 22 欧陽予倩「我在台湾導演的三個戲(一)~(五)」、  
 (一)『国声報』「南光」副刊 第31期 1947/5/1、  
 (二)同副刊 第32期 1947/5/2、  
 (三)同副刊 第33期 1947/5/3、  
 (四)同副刊 第34期 1947/5/4、  
 (五)同副刊 第35期 1947/5/5、
- 23 欧陽予倩前掲記事、(二)同副刊 第32期 1947/5/2。
- 24 嘉義市議會：一九四六年七月二七日(『台湾新生報』1946/7/29)、台南市南区區民代表里長聯合大会：一九四六年七月二八日(『台湾新生報』1946/7/31)、新竹市參議會：一九四六年七月十七日(『台湾新生報』1946/7/20)、高雄市參議會：一九四六年七月二五日(『台湾新生報』1946/7/28)
- 25 この歌舞の訳について、原文は英語で「Renew」とあるが、「鄭成功」の劇の最後には原住民の歌舞が配されており、これはReview(レビュー)のミスプリントであろう。
- 26 楊雲萍「近事雜記(三)」、『台湾文化』台湾文化協進会 1947/2/1 21-22 頁
- 27 欧陽予倩(インタビュー)「台湾劇運的胎動」、『大明報』大明報社(台北)1946/12/15
- 28 欧陽予倩「關於『鄭成功』的演出」、「文藝」『台湾月刊』第三・四期合併新年特大号(上海台湾革新協會 1947/1/10)
- 29 横地剛『南天の虹』藍天出版社 2001 88 頁参照。
- 30 「本省文化消息(一)」、『台湾文化』台湾文化協進会 第二卷第二期 3 頁
- 31 元來の出典は、『台湾日報』「台風」副刊 一九四七年二月一二日によるが、筆者の手元にないため、「五分五分」『台湾文化』第二卷第三期(1947/3/1) 18 頁を参照した。
- 32 夢周は、また『台湾文化』(第二期第六卷 1947/9/1)に掲載された「文藝大衆化」というエッセイを書いている。大まかに言えば、大陸における白話文の普及に付随した文芸大衆化論の議論を、魯迅などを引用しながら展開するものである。その意味でこのエッセイから、夢周の大陸における政治文化的ポジションが伺えるわけである。このエッセイにおいて、大陸における議論を考えた場合には、さして珍しい論点が提出されているわけではない。ただここで興味深いのは、そういった議論を台湾で行うことの意味である。夢周は、大陸における言語改革に触れ得なかった台湾の歴史を踏まえた上で、これからの台湾における文芸の振興が図られる上でも、平易な白話文によりつつ、より深い内容を表現し得るためにも文芸の大衆化が必要であると述べるのである。
- 33 林基「墾荒・播種」、「南光」副刊 第一〇五期 1947/8/4
- 34 この部分で文中には「魔悪」とあるが、「悪魔」のミスプリントであろう。
- 35 双鋒「略論木刻芸術今後応走之途径」、「南光」副刊 第一一一期 1947/8/12
- 36 王白淵「所謂「奴化」問題」、『新生報』1946/11/23  
 王白淵「社論 告外省人諸公」、『政経報』第二卷第二期 1946/1/25